

平成17年度 読書感想文コンクール

このほど、角館図書館後援会主催の平成17年度読書感想文コンクールが行われ、小・中学生、親子ペア合わせて55点の応募作品の中から佐藤亜加理さん（角館西小学校5年）の『ほんの少しの勇氣』が最優秀賞に選ばれました。今回審査結果と最優秀賞の作品を紹介します。

読書感想文コンクール審査結果（敬称略）

最優秀賞 佐藤亜加理（角館西小5年）

小学校下学年の部

入選 戸澤甲斐（中川小1年）
山崎涼子（角館西小2年）
佳作 小松亜季穂（角館東小2年）
戸澤栞奈（中川小2年）
高橋あやか（白岩小2年）

小学校上学年の部

入選 高橋菜摘（西長野小5年）
佳作 青山響（中川小5年）・北林樹理奈（白岩小6年）
高橋綾菜（白岩小6年）・茂木みづき（西長野小4年）
館岡早貴（西長野小5年）・藤井沙耶花（西長野小5年）
真崎宏也（角館西小5年）

中学校の部

入選 渡辺真祐香（角館中2年）
佳作 岡田遼（角館中2年）
千葉尚子（角館中3年）

親子の部

佳作 米澤恭太郎（白岩小6年）米澤雅子（母）
嵯峨春奈（西長野小6年）嵯峨克朱子（母）

最優秀賞作品

『ほんの少しの勇氣』

（図書：「もちろん返事をまっています」）



さとうあかり
佐藤 亜加理

健康な私には、自分の体が思い通りに動かせない苦しみを考えたことはありません。この本に出てくる少年ドゥデイの生き方を知り今までの自分の生活を「はっ」と思うことができました。

ドゥデイは、脳性マヒで手足が不自由です。手がふるえてペンを持つことができないので、手紙をワープロで打ちます。首もなめにかたむいて、ボタンひとつで動く電動車イスを使うこともできません。ノアは自分の学校のこと、友だちのこと、楽しいことを手紙に書きます。けれど何度か文通をしているうちにノアは、自分が健康でなんでもできるということで身体しょう害者のドゥデイをきずつけているのではないかと思い始めます。ある日の手紙にノアが「自分が通っている体そうクラブはつまらない」と書くと、ドゥデイからの返事にはこう書かれていました。「体そうクラブはつまらないって？飛んだりはねたりいろいろな道具を使って練習できるなんてすごくしあわせなんだって思わない？」きっとしょう害者のドゥデイには自由に体を動かせることがうらやましかったのだと思います。けれどノアにとっては自由に歩いたり、体を動かすことはしあわせなことではなく、あたり前のことなのです。何度か文通するうちにノアはどうしてもドゥデイに会ってみたいくなります。けれどドゥデイは、体の不自由な自分を見られるのがいやで会いたくないと言います。けれど本当の友だちになるためには、本

当の自分を見てもらおうと勇氣をだして、ノアを家にしようたいして、楽しくすごしました。私がこの本を読んで思ったことは、体が不自由だということはけしてはずかしいことではなく、またそういう友だちをもつこともはずかしいことではないということです。

私のクラスに、ろう学校の友達が遊びに来たことがありました。その友だちは生まれた時から少し耳のきこえが良くないのです。先生から話を聞いていたのですが、私はついつい「どうやってあいさつしたらいいんだろう」「もし、私の言っていることが伝わらなかったらどうしよう」と心配ばかり先に立って、なかなか近よることができませんでした。

いつだったか、学校でなべっこをした時も、その友だちが遊びに来ました。前よりもずっと手話がじょうずになって、堂々と話をしていました。私は、今度こそ勇氣を出して、手話で「こんにちは」とあいさつしてみました。するとその友だちも指で「こんにちは」と返してくれました。あの時はとってもうれしくてほんの少し相手のことを気をつけて、ほんの少し勇氣を出すと心が通じ合えるんだと知りました。

ドゥデイとノアのお話を読み進めていて、自分の健康が当たりまえではなく、この健康に感謝して目あてをもって一日一日を精いっぱい生きていけたらと思いました。